

## 僕は砂漠の地方からやって来た

六月一四日（月）午後。僕は今、甘肅省の省都、蘭州にいる。黄河のほとりにそびえる白塔山公園の頂上まで登ったあと、ふもとの茶店でお茶を飲みながら休憩しているところだ。敦煌市街で劇曲を聞きながら飲んだものと同じ、何かの木の実と氷砂糖の入った甘いお茶だ。甘いお茶というのは日本ではあまり想像ができないけれども、長いバスの旅に疲れた身体にはほっとした憩いをもたらしてくれる。ただ木立に囲まれた静かな茶店のテーブルに聞こえてくるのは中国的な劇曲の響きではなく、現在大流行中の香港歌謡。ラジカセから流れてくる歌謡曲の調べに混じって、ときおりコーラン読唱の断片的な響きがモスクの方から聞こえてくる。

白塔山公園は黄河の北のほとりにあり、その山頂からはチョコレート色の流れを運ぶ黄河とその南に広がる蘭州市街が一望できる。黄河はこのあたりでは川幅百メートルくらいだろうか。チョコレート色と言えば、ある種の優しい美を感じさせ、また一見そのように感じないこともないのだけれども、その色はむしろ赤土の褐色だ。白いシャツをその流れで洗えば、またたく間に泥まみれになってしまいうだろう。黄土色の長江にも驚いたけれども、黄河の褐色はむしろ凄惨な印象だ。それは緑や実りを僕たちにもたらしてくれる川、人々の暮らしというものに親和的な川というイメージを自然と感ずる感受性にとっては反自然的なものに映る。いや、自然も反自然も恣意的な座標軸によって語られうるものにはすぎない。僕が「凄惨」という印象によって語りたいのは、むしろそのような座標軸そのものに対する拒絶の感覚であり、例えばある種の廃墟が僕たちに告げ知らせるような感覚に似たところがある。

僕は白塔山公園の急な石段を登っていった。あえぎながら登りきった山頂には静かな寺院や茶店があったけれども、見学もそこそこにして、見晴らしの良い場所に腰を下ろした。小高い場所から蘭州の街を見下ろすと、眼下には褐色の黄河の流れが巨大な生き物のような存在感を誇示しながら横たわっていた。黄河の向こうにはスモッグにかすんでいるかのような蘭州の街。それはしばらく都市らしい都市からは離れていた僕にとって久しぶりの本格的な都市の景観であり、大小無数のビル群を抱えた蘭州の街はかなりのスケールで視界に横たわっていた。市街地の背後には遠く山影がそびえていた。白塔山公園の高みから蘭州市街を遠望する僕に、しかしざらりとした異物感とでもいった印象を与えるのは褐色の黄河なのだった。それに比べると蘭州の街や山並の姿は僕には等しく遠望の距離感に収まっているように思われた。蘭州市街のかたわら

に横たわり、それに同化することもなく、あるいはそれ以上の存在感を放射する黄河を眺めながら、僕の記憶から立ち上がってきたのは、子供のころに目にした臨海コンビナートの景観だった。もしかしたら黄河の赤茶色い流れが、公害規制を受ける前の化学工場の廃液を連想させるかもしれない。しかしそれ以上に僕がその連想において感じていたのは、その外部性、そしてそれ故のリアリティーのようなものだと思う。

コンビナートはその下部構造としての生産性、あるいは市民生活への接続性にもかかわらず、市民意識の外部であると言える。それは臨海というその地理においても、またその景観においても、その内部における生産に関しても外部性を示す。その巨大建築群からは生活臭は抹消され、あるいは最小限度に圧縮されて、生産の統治に置かれている。そしてコンビナートにおける生産というのは圧倒的な量としての物質の化学的な転換だ。生産は物質を制御しているのだが、一方で物質は生産を制御するのだ。労働も組織も、建築も建築群としてのコンビナートの景観も、物質の化学的な転換という論理に従って構成され、いわゆる人間性は物質に従属する。もちろん僕はここで公害問題を改めて告発しようとか、労働現場の非人間性を問題にしようと思っっているわけではない。人間的とか非人間的とかいう市民的な価値観の外的ことを言おうとしている。あるいは。あるいは価値観がその外部と接するその臨界面のこと。価値観の外部、それはたぶん空虚なのだ。コンビナートは、市民生活と接続しつつも市民生活が隠蔽しているその外部性をかいま見せる。いわば板子一枚下にうごめく圧倒的な物自体とも言うべきもの。

僕は白塔山の山頂から黄河の流れを眺めながら、漠然と子供のころ見た記憶のある臨海工業地帯の景観を、そしてその幻惑を思い起こしていた。そしてふと思う、黄河は砂漠なのだ。赤茶色い黄河の流れがコンビナートを連想させるのは、ともに外部を暗示しているからなのだ。それらはともに市民生活（都市）の外部を暗示する。コンビナートは巨大な量としての物質（の化学）を、そして黄河は砂漠を。

僕は砂漠の地方からやって来た。

※

六月一三日（日）午前九時前。つまり昨日のことだ。僕はまだ寝ぼけ眼のヒゲとスカシに軽く挨拶をして、西域賓館をあとにした。朝飯に長途汽车站付近の食堂で牛肉面を食べ、汽车站へと向かう。乗り場に着いたとき、あたりにはそれらしい人影はなく、僕は少し不安になる。グルムドから敦煌までの四日間をともに過ごした二人と別れて、僕はまるで

再び裸で中国というものに足を踏み出したかのような気がしたのだ。日本というある種の気をあとにして。二人連れという彼らの旅がふとやらやましく、また久しぶりに感じるような気がする少し寂しいというほどの緊張感が心地良くもあつた。

発車時刻の午前一〇時前には三々五々乗客も集まり、服務員が改札を始めた。蘭州という大都会へと向かうバスだけあつて、大きな荷物を抱えた人や見送りの人と別れの挨拶をする人もいて、僕も少し感傷的になる。もう二度とは敦煌に来ることはないかもしれないのだ。もちろん僕の感傷にはラサ以来の厳しかったバスの旅もこれで終わりだという安堵のような気分も含まれていた。

バスは中国製。しかしゴルムド―敦煌間のバスのように三人がけというような窮屈なものではなく、二人がけの観光バス風ではあつた。

午前一〇時に敦煌を出発したバスはただひたすら岩と土の砂漠を走っていた。ただひたすら何も無い荒地と、その荒涼とした砂漠を渡る風に吹かれながら佇立する電柱。延々と律儀なほど規則正しく道路沿いに羅列する電柱。まるでそれはこの人跡を拒む砂漠にあつて、ただ一筋の文明とも言える不思議な感覚を僕に引き起こした。いわば、ただ一筋の線としての文明。あるいは生命線。生命とはこの無数に羅列する電柱を建設した人々の汗や指紋であるとともに、それはまたこの徒労ととれないこともない規則性への意志なのかもしれない。

バスは昼一二時過ぎにオアシスの街、安西に到着。小さなバスターナルに入つて、昼食休憩。僕はひとり空き地のようなターミナルを出て、適当な食堂を捜した。通りには人影もほとんどなく、砂埃にくすんだような街だった。道路沿いに植えられた街路樹も砂埃をかぶっていた。たまたま道路沿いに食堂を見つけたので入つていくと、昼時だというのに客は僕ひとり。おまけに料理もあまりなくて、結局加工肉面（二元）ということになつてしまった。昼食後、少し安西の街を歩いた。天気は良かったけれども、街というにはあまりにも閑散としたオアシスだった。メインストリートの道路沿いには三、四階の真新しいビルがポツンと建っていたが、それ以外は世界一風が強い場所のひとつとして知られているオアシスにふさわしくその身をこごめたような街並だった。

バスの時間を気にしながらターミナルの建物に戻つてみると、まだ出発の様子はなく、乗客たちは思い思いに待合室でくつろいでいた。僕も空いたベンチに腰を下ろして、煙草を一服した。目の前では若い女性がひまわりの種を食べては、その殻を足もとにまき散らしていた。退屈そうな売店の服務員。なんということもなく、ただ時間をもてあます待ち時間。

やがて出発の時間が来たのだろうか、誰からということもなく乗客はバスの方へと向かっていく。座席に腰を落ち着けて、さあ出発と思っていると、運転手はなんとボンネット（中国製バスのボンネットは運転席の隣にある）を開け始めるではないか。がくぜんとして見ていると、彼は手なれた手付きでエンジンのシリンダーヘッドを外し、ポイントかなにかの調整をするのだった。助手となにか言葉を交わしながら、再びエンジンにふたをする。めでたくエンジンは動いたのだけでも、どこか不満そうな様子を見せる運転手の態度を見て、僕は不安になったのだった。まさか砂漠の真中で止まってしまうというような事態になりはしないだろうなど。

安西を出発したバスは再び砂漠を走り続けた。どこまでも土と岩だけの荒れ地は続くのだったけれども、気のせいか少しづつ緑も多くなっていくような気もしたのだった。もともと緑とは言っても樹木ではなく、乾燥地に特有の細い葉の植物だったり枯れ草のような植物なのだけれども。荒れ地の向こうには岩肌をさらした山並が遠くだったり近くなったりしながらそびえていた。長い退屈な時間を、僕は漠然とした物思いとともに過ごしていた。それは、例えば数年前サハラ砂漠を旅行したときの思い出だったりした。そしてふと思う、「砂漠とは記号の絶句」なのだ。

八月、真夏のサハラは考えていたようなさらさらとした砂漠ではなく、ここ河西回廊付近の砂漠のように果てしない荒れ地という印象だったけれども、ただ一点違っていたのはその暑さだった。アルジェリア領内のオアシスからオアシスまで、それはほぼ半日から一日くらいの行程なのだけれども、陰らしい陰もなくただ一本道の道路が炎天の砂漠に走っているだけ。激しいバスのエンジン音を耳にしながら、僕はふと果てしない宇宙空間を漂っているカプセルの中にいるような気がしたのであった。いわばカプセルの内部だけが「生」の領域であり、それ以外のすべての空間が「死」であるような。それは人間の跡というものの一切見当らない果てしない荒れ地の景観と灼熱と言ってもいいような暑さのためにもそのように思われたのだけれども、カプセルが「生―記号」であるとしたら、そこから見た砂漠は記号によっては表わせない記号の外部、いわば「記号の絶句」としてしか表わせない何ものかのように僕には思われた。そしてそのような外部としての砂漠（意思）と身近に接しつづ暮らしている民にとって、厳格な一神教としてのイスラム教はとても似つかわしいように僕は直観的に納得していたのだった。

六月初旬。河西回廊の砂漠には灼熱の暑さは欠けてはいたけれども、土と岩だけのその光景は「記号の絶句」としての砂漠を十分に感じさせ

るものだった。そこでは僕たちはただ単調に、寡黙に運ばれていくしかないのだ。いわば「生」のたとえとしての長距離バス（カプセル）の内部に息をひそめるようにして。

やがてバスは同じく河西回廊のオアシス、玉門で少休止したあと、再び果てのない荒野を走っていった。ときおり、手の届くほど間近に緑のない岩山が迫った。黄土色の岩山や、目の覚めるほど鮮やかな褐色の岩山。

夕方近く、バスは嘉峪関を通過した。明代（一三七二年）に、当時河西回廊にまで勢力を伸ばしていたモンゴル軍を破ったときに建築された万里の長城の西端の砦だ。もしも余裕があれば立ち寄りたいたいと思っていたのだけれども、残念ながらパスした。しかしバスの車中からも荒地地の中に建設された砦の姿ははっきりと見ることができ、それだけで僕は満足した。おそらくごく最近に修復されたのだろう嘉峪関の砦はとても明代の建築とは思えないほど立派に見えた。

嘉峪関を過ぎると次のオアシス都市、酒泉までは二〇分ほど。途中も荒地地なのだけれども、道端には植樹がされているし、視界にはまばらな林のような緑も見え、嘉峪関と酒泉とはそれぞれが孤立したオアシスというよりも地続きのオアシスという印象だ。

酒泉はその中央部に鼓楼がそびえる中国風のちよつとした街だ。ちよつと夕方方の時間で、大通りは人々で賑やかだった。街の中心を少し外れたところにバスは停車し、夕食の休憩ということになった。三々五々バスを降りて食事に向かう乗客たちに従ってバスを降りただけけれども、すぐに彼らとはぐれてしまった。というのも、長いあいだバスに閉じ込められていたこともあり、またずいぶんと久しぶりのような気がする街の賑わいに心が浮き立っていたのだ。

しばらく酒泉の街をぶらつき、偶然に見つけた屋台街を入っていた。イスラム風の串焼きの焼き肉（マトン？）や餃子、それに焼きそばなど。あまりに広くはない道路の両側にすきまなく屋台は立ち並び、道路にも屋台にも散歩や食事をする人々で賑わっていた。久しぶりの屋台街を浮き浮きとしながら通り、また逆戻りし、適当な屋台を捜した。夕食なので本当は飯を食べたかったのだけれども、若い女の子の屋台に呼び止められて思わず腰を下ろした。酒泉風焼きそばの屋台。大盛りは三元で、ゲップが出るほど満腹になった。

食事をすませてバスに乗り込むと、隣の青年が煙草を差し出した。

「どうぞ、よろしく」という意味だったのかもしれないけれども、

「謝々」と答えながら煙草を受け取っただけだ。少し申しわけない気が

したけれども、言葉を捜しながらの会話も筆談も気分が乗らなかったのだ。

酒泉を出てからも砂漠のような荒地が続くのだったけれども、所々に植樹された林があったり、開墾された畑があったりして、次第に人跡は濃厚になっていくようだった。道路の両側にも並木が植樹されていた。それらは並木と言うにはあまりにけなげなありさまだったけれども、人の体温とでも言うべき温みを感じさせるには十分だった。（もしも、人の体温表示というものがあるとすれば、チベット、青海両省では一部の都市を除いては、ほとんど体温ゼロの荒野の中にまぎれて見分けられないほどの微粒子のような体温が存在するだけだろう。砂漠地帯では荒野の中に孤立した体温としてのオアシスがあるだけだ。やがて孤立した体温地帯は規模を大きくし、あるいは接続しあって、やがて都市や農村を含む巨大な体温地帯になっていく。）孤立した体温としてのオアシスから広大な荒野を通り抜けて、僕は再び中国という巨大な体温地帯のふところへと戻っていくのだという気がした。

やがて夜になり、車中からの視界は闇に閉ざされた。この夜を乗り切れば蘭州、再びある種の暖かい場所に戻っていくのだと漠然と期待しながら、僕はバスの振動に包まれるようにしてまどろんだ。

真夜中。あまりの寒さに僕は目を覚ます。あわててジャンパーを着込み、バッグからバスタオルを取り出して膝に当てた。座席が運転席の後ろだからか、すきま風も冷たくて、ゆっくりと眠ってもいられないような寒さだ。おそらく山岳地帯を抜けるためだろうけれども、このまま砂漠地帯を抜けて暖かい場所へと向かうのだと思っていた僕は、まるでカウンターをくらったような気がしたのだった。

幾度も浅い眠りに落ちては目覚め、その度に寒さに凍えるのだった。おまけにバスの座席はやはり眠るためには窮屈だった。足を投げ出す場所を捜したり、少し横向きになったり、またうつぶせになったり、いろいろためしてみるのだけれども眠りをつかまえることはできない。幾度も半熟の眠りの周辺をうろついては引き戻された。

やがてため息をつきながら眺めていたまっ暗闇の窓辺に明かりが差し始め、ふと目覚めると、そこはすでに中国の田舎の風情だった。バスは幾度か停車し、その度に乗客は少なくなっていく。酒泉から蘭州までには都市らしい都市はないので、ほとんどの乗客は蘭州まで行くものと思っていた僕は、思いがけない幸運に出会ったわけだ。隣の青年が空席になった後部座席に行ってしまったのを幸いに二人がけの座席に横になって、しばらくゆっくりと眠ることができた。もともと寒さは少し治まったとはいえ、相変わらずだったけれども。

しばらく眠り、再び目覚めると蘭州だった。バスは都市の郊外という霧囲気を漂わせた道路をずっと下っていった、道路沿いにはぼつりぼつりと民家や商店などが見えた。まわりが明るくなるにつれて、寒さに凍えきった身体も溶かされていくようだった。蘭州市付近の街を通るとき、登校途中の子供たちの姿を目にして、僕は思った。僕が戻ってきたのは、それは暮らしというもののなにかかもしれない、と。

蘭州市街を入ったところで給油のために乗客は一旦下車し、僕は都会の朝の空気をゆつくりと吸ってみた。それは果てしもないように思われた荒野の空気とも、またオアシスの空気とも違って思うように思われた。

給油を終えたバスは激しく車の行き交う大通りをバスターミナルへと向かって走っていった。排気ガスや人々の脂にくすんだような街の景観が視界を過ぎていく。それはしばらくぶりに目にする都市の景観、あるいは堆積した営み、歴史とでもいべきものだった。もちろん年代としての抽象的な歴史ではなく、積み重なった指紋、脂、あるいは汚れとしての歴史だった。もちろん都市にはそれら増大する暮らしのエントロピーとでもいべきものを排出する機構は備わっているものだけれども、それでも排出しきれない何ものかが確実に堆積していくものだ。

砂漠には歴史はない。そこでは僕が試みに考えたような暮らしのエントロピーという概念自体が成り立たない。砂漠はあえて定義するならば歴史のずっと彼方、あるいは歴史のずっと始源なのだ。どちらにせよ砂漠を歴史において完全に定義することはできない。僕たちはただそれを指差すことができるだけなのだ。

僕は砂漠の地方からやって来た。蘭州、つまり歴史のただ中へと。そしてそこにある種の居心地の良さ、ある種の温み、ある種の親密さ、そしてある種のいとわしさを感じていた。

ほぼ丸一日のあいだ河西回廊の砂漠と山岳地帯を走りつづけた長距離バスはうなりをあげながら蘭州の繁華街を走っていた。運転手の肩越しに覗き見るフロントガラスの向こうには都会の朝の日常が操り広げられていた。少しくすんだような色合いのビル街。歩道を行き交う人々。開店したばかりの商店。自転車。そして渋滞。クラクションとエンジンの音。フロントガラス越しに都会の景色を眺めていると、まるで野生の獣の背にいるかのように思われた。荒々しい自然を走り抜けて、長距離バスはまだ都会への適応にとまどっているかのように。まるで箱庭のような都会に収まり切れない馬力をもてあましているかのように、さかんに空吹かしをするのだった。

バスは蘭州市の中心に位置する汽車東站到着した。

ほぼ一昼夜のバス旅行を終えて汽車站到り立った僕は、とりあえず火車站へと向かうことにした。もともと次の蘭州―西安のチケットを手に入れるというはつきりとした目的があつてのことではない。久しぶりの大都会、しかも何のつかりもない見知らぬ都会に投げ出された旅行者にとつて、ターミナルというのは灯台の火のような存在なのだ。すべてが確固として自分とは関係なく営まれている都会の日常にあつて、ターミナルというのは多かれ少なかれ非日常的な匂いを持ち、その非日常へと接する雑多さこそがひとり旅の旅行者にとつては憩いを与えてくれるのだ。もともと蘭州市の地図を手に入れること、西安行きの方の情報を仕入れるという目的もなかつたわけではないけれども。

汽車東駅から蘭州の南端にある火車站までは、歩いて二〇分ほど。林立するビルディングや広い道路、めまぐるしく行き交うバスや自動車の交通量を目にして、僕は軽いめまいと気後れを感じながら歩いていった。それでも火車站の前広場に着くと、そこには飲物の露店や雑誌のスタンド、行き交う人々や座り込む人々、そして地図売りのおばさんたちの姿があり、少しなつかしいような気がするターミナルの情景に接して、僕は次第に元気になつていったのだ。

売店でジュースを買い、地図売りのおばさんから蘭州地図を買つて、售票処付近の階段に座り込んで今後の方針を検討した。とりあえずはホテルを確保しなければならぬのだけれども、あまり情報がなかつたので、とりあえず蘭州飯店にあつてみることにした。それは蘭州一のホテルなのだけれども、ガイドブックによるとドミトリーがあるということなので、もしかしたら入れるかもしれない。蘭州飯店は火車站からまっすぐに天水路を北上した市街地の真中にある。歩いて二〇分ほどの距離だろうか。久しぶりの都会にやはり気後れしていたためだろうか、路線バスを利用するという発想はまったく僕には思い浮かばず、何の迷いもなく歩いていくことにしたのだ。

蘭州飯店へ向かう前に、售票処の中を覗いてみた。まだ列車の時刻表も調べていなくて、チケットを購入するつもりはなかつたのだけれども、だいたいの状況だけでもつかんでおこうと思つたのだ。

售票処の内部は相変わらずの混雑で、少しくんざりしたような気分で行き表などを眺めていると、中年の女性が声をかけてきた。聞いていると、どうやら切符を代わりに買ってやると言っているようだった。考えてみると、ホテルを決めてからもう一度切符を買うためにここへ戻ってくるというのも面倒な気がしたので、彼女にまかせて切符を買ってもらおうか、と思う。しかし列車番号もまだ調べてはいなかつたので、僕は

「明日の西安行き」ということだけ告げて、彼女にまかせることにした。岳陽での出来事を思い出して、「明日」ということを強調したのは言うまでもない。

切符を求めて行列をつくる人々で混雑している中で、彼女がどのような切符を買ってくれるのか、興味を持って見ていたのだけれども、実にあっけなかった。岳陽の少年のように曲芸さながらの術で切符を手に入れるわけではなく、なんと彼女は人気のない窓口へと平然と向かった。それは軍人専用の窓口で、おそらく彼女の夫か息子が軍人なのだろう、身分証のようなものを窓口に提示して、簡単に切符を手に入れたのだった。ちなみに西安までの料金は二九元（硬座）で手数料は一〇元。なんと手軽なアルバイト。

順序が逆だけれども、チケットを受け取ってから時刻表を調べてみた。列車は八八次、蘭州発、浦口（上海）行き。蘭州発は明日の午前一〇時三十分、西安着は夜中の〇時過ぎだった。西安着が夜中だというのは少し不都合だと思っただけけれども、楽をして切符を手に入れられたことだし、満足することにした。

汽車站を出て、天水路の並木の歩道を北に向かって歩いていった。途中、和平飯店という立派なホテルがあっただけけれども、ガイドブックにその情報はなく、中国人用のホテルなのだろうと思ひ、とにかく蘭州飯店にあたってみることにする。蘭州飯店は天水路と東西に走る東崗路の交差する所にあり、その十字路は大きなロータリーになっている。

どっしりとしたいかにも高そうなホテルのロビーに入り、フロントの女性に声をかける。

「我想住你們飯店（泊まりたいのですが）」

「房間有吗（部屋はありますか）？」

「有（あります）」

高い部屋だと困るので、あわてて僕は尋ねる。

「多少錢（いくらですか）？」

「シーウーイエン（一五元）」

ぶっきらぼうに女性職員は答えた。

しばらく僕は考え、そして思い当たる。おそらく僕の風体を見てドミトリーを求めているのだと先回りして考えて、その値段を言ったのだ。ドミトリーに入ることができてよかったという思いと、一見して貧乏旅行者だとわかるのかという軽いショックが入り混じった複雑な気分になった。（南寧などの中国南部をまわってきたためか、それとも標高三六〇〇メートルのラサの日差しが効いたのか、僕はまっ黒に日焼けしてい

た おまけにしばらくヒゲを剃っていなかったし、長いバスの旅でとてもくたびれた様子をしていたのだらうと思う。」

ドミトリーのある西楼は本館の脇にあり、ドミトリーは二階のいちばん奥にあった。一階も二階もその部屋を除いては旅行会社などの事務所になっていて、宿泊できるのはその部屋だけようだった。まるでやっかいもの扱いされつつも、辛うじて生き延びているといった風情のドミトリーの部屋だった。

部屋の中には一二個のベッドが、まるで病院の大部屋のように並んでいた。まさにバックパッカーたちの秘められた楽園。二、三人の西洋人旅行者がいたので、軽く挨拶をして、自分のベッドで休憩した。

しばらく休憩したあと、蘭州飯店前のロータリーから一路の路線バスに乗って、西関什字という所まで行き、そこから北へ、黄河のほとりにそびえる白塔山公園に向かった。というのも明日の朝にはもうこの蘭州を出発することになったので、なにはともあれ黄河を見ておかなければと思ったのだ。

僕は白塔山公園の小高い場所から蘭州の街を見下ろした。眼下には黄河の褐色の流れが巨大な生き物のような存在感を示しながら横たわっていた。黄河の向こうにはスモッグにかすんでいるかのような蘭州の街。僕は微かなやりきれなさとともに、その砂埃にか歴史の堆積にか、くすんでいるような蘭州市街の景観に、僕の所属を感じた。それに対して、黄河は僕の所属とは関わりのない一個の独立した存在、いわば歴史の外側にある実在のように思われた。

「黄河は砂漠なのだ…」

黄河は蘭州の街を横断する外部だ。もちろん蘭州という街の成立、蘭州に暮らす人々の生活にとつて黄河の恩恵というものを欠かすことができないのは言うまでもないことだけれども、もちろん自然というものは常に両義的なのだ。それは人々の生活に欠くことはできない必要あるいは恩恵のだけれども、また一方では人々のコントロールの及ばない外部なのだ。黄河は人跡の及ばない西部の山岳地帯、あるいは河西回廊の乾燥地帯を差し示す。黄河の赤土色は端的に言ってこれら乾燥地帯の大地であり、従って黄河は実用面の効用とはうらはらに実は砂漠なのだ。そして砂漠は「西域」として異邦、異文化の地でもある。つまり黄河が暗示する外部性とは人跡の及びがたい砂漠、山岳地帯だけではなく、異域としての外部性でもある。そのことを象徴するかのように、黄河の沿岸、とくにこの白塔山のふもとにはモスクが建ち並び、回族やウイグル

族の人々がたくさん住んでいる。それに対して漢族の多い蘭州の街はほぼ黄河の南に広がっている。

白塔山公園のふもと茶店には、香港歌謡の調べのまにまに、コーラン読唱の響きが微かに聞こえてくる。遠く近く重なりあいながら聞こえてくる二つの調べを耳にしながら、僕は不思議な感慨にうたれていた。都市の調べと砂漠の調べ。おのおのがおのおのの場所に満ちたりてあるときには感じられない調べの断面とでもいうような感触を僕は感じていた。都市の調べと砂漠の調べ、どちらが良いとか悪いとかいう問題ではない。いわば調べがその世界の果てにかいま見せる寂しさ、その断面の感触のようなものだ。

蘭州。ここでは都市（歴史）と砂漠（歴史の外）とが接している。普通、僕たちの暮らしにおいてはアタリマエすぎてまるで自然のように思われる記号的な秩序というものが、いわば絶句にさらされ、つねに絶句を抱えているということを、象徴的、実体的に感じさせる。記号の絶句とはどういうことだろうか。それはおそらく記号的な秩序がすきまなくおおっていたリアリティーというものが、それとは異質のリアリティーに触れるということだろう。リアリティーにはある種の断面が存在するという発見でもある。そこにかいま見えるのは記号の秩序という面から言えば空虚であり、記号の権力性から言えば自由の感覚でもある。これらのことを少し図式的に考えてみよう。

まずは理想的な（？）田園。砂漠が記号の絶句だとしたら、それに対して照的な田園は記号の充足だといえる。もしも理想的な田園（それは必ずしも実在の農村ということではなく、むしろ仮構なのだけでも）というものが考えられるとしたら、それは経済的、文化的にほどよく閉鎖され、伝統は発展することも衰えることもないままにほどよく持続するだろう。それは記号的に閉鎖し、自足しているだろう。季節的な円環に従って記号はそれをなぞりつつ流動し、季節的な円環を擬態する。そこでは外部は完全にか不完全にか隠蔽され、記号は自足する。記号が自然において擬態され、あるいは自然が記号において擬態されるということだ。記号と自然との間に意味という接着剤が充填されるということだ。従って田園に充滿しているのは記号と言うよりもむしろ粘性の意味なのだ。

それに対して、都市は田園と田園との間において、互いに閉鎖的な記号体系の間の交換として発生する。モノが交換されうるということはどういうことだろうか。田園においてモノはモノとしての裸の姿を決して表わすことはない。田園においてはモノも自然も意味という粘性質におおわれていて、その場からは切り離すことはできない。モノが交換され

るためにはモノは一度その意味を剥ぎ取らなければならないのだ。つまり交換の場（都市）というのはモノが意味という粘性の衣を脱ぎ捨てて「無縁の場」でなければならぬ。

都市はそのようにして「無縁の場」として発生した。都市とは田園的に自足した記号が絶句する場なのだ。田園の視線にとつてはそこは廃墟でもあり、また田園的な拘束からの自由を意味する場でもあった。しかしまた一方、田園的な拘束からの離脱は都市的な拘束の発生でもある。

「無縁の場」としてそれぞれの意味という衣を脱ぎ捨てて交換されるモノとモノとは、意味よりも抽象的な価値という直線性（量）に貫かれることになる。異なるモノとモノとが交換されるやいなや、それぞれ異なる具体性を持ったモノとモノはそこに価値という抽象的な実体を生み落すことになる。「無縁の場」としての都市はその拡大と成長にともなつて、そのような交換による粒子状の価値を、価値の空間として張り巡らすことになり、価値という縁、意味を生み出すのだ。一方において、モノとモノとの交換は田園的な記号体系の交換でもある。記号はそのとき田園的な粘性の意味の束縛を解き放ち、記号として交換されるのだが、モノの交換が価値という抽象的な実体を生み、さらには価値の空間として拡大していったように、より抽象的な記号の意味（価値）というものを生み、それを記号の空間として拡大していく。田園的な記号が充滿する意味の空間の不可欠かつ有機的な構成要素としていわば田園的全体によつて担保されていたのに対して、都市の空間を流通する記号はそのように響きあう全体性というものを持たない。つまり擬態の回路は不可避免的に破られているのだ。しかし都市もまた擬態する。擬態によつて田園的な擬態の破れ目を取りつくりうとするのだ。都市における擬態の回路は二つの神話に基づいているように思われる。それは、一つには内面性の神話。個人の内面が理想としての全体性を確保し、内面において理想と現実が葛藤するという神話。あるいは人間の内面というものが実体として存在し、その内面が記号の意味、価値を担保する、言い替えば、社会というものが人間という実体に還元できるという神話だ。そしてもう一つは歴史（成長）の神話。失われた全体性とも言えるものを時間軸に置き換えたかたちで回復しようというものだ。

しかしながら、現在というのはこのような都市的な擬態というものが挫折した時代なのではないかと思われる。いわば記号の自己言及性とも言ふべきことが露呈する時代。

都市というのはもともと「無縁の場」だった。都市という「無縁の場」での交換において、瞬時あらわになるのは充実した意味という粘性質を剥ぎ取られた物自体、唯一的で等価物のない物それ自体とも言ふ

べきものだろう。その瞬時、記号体系は絶句する。記号は意味という接着剤を外れて、その断面をあらわにするのだ。交換とは、絶句し立ち止まったその切断面を飛躍する行為だ。都市的な擬態というのはこの断絶この飛躍を制度的に塗り込め、あたかも自然であるかのように見せるということに他ならない。モノは交換において抽象的な実体としての価値を析出する。充実した意味に取って代わって面値があらゆるモノを貫くリアリティーとなることによって都市は成長を始めることになる。なぜなら価値とは量であり、内在的な天井を持たないものであるからだ。成長は都市の宿命だ。都市の記号体系はつねにキレツを抱え、その外部に開かれていくのだが、それはつねに成長という擬態的な回路によって回収される。モノとモノとの交換やモノの生産が都市の機能であった時代、この擬態は比較的安定的に作動していたとは言えるかもしれない。なぜなら、価値は実体的であり、モノの交換や生産を貫き、モノとともにあつたからだ。記号もまた抽象的、実体的な意味とともにあつたと言える。しかしながら、現在というのはそのような実体性によって記号体系が支えられているという擬態の神話が崩壊しつつある時代だと言えるかもしれない。それは消費が都市の第一の機能になつたということであるかもしれないし、あらゆるメディアが都市には張り巡らされ、モノという負荷を逃れて情報（記号）がそれ自体として流通するようになってきたということかもしれないし、またそのようにして消費というものがモノの消費のことではなくて、記号（情報、イメージ）の消費に重点が移動してきたということかもしれない。どちらにせよ僕たちのあつかう日常的な記号というものが実体的な生活によって底支えされているというよりもむしろメディアによる情報的記号的な社会意識によって支えられているのは間違いない。しかしまたそれはメディアによる専制が支配しているということとは違う。メディアもまた日常的な記号体系によって底支えされているのであり、いわば記号が記号を支え、記号が記号を言及するという記号の記号性があらわになつているのだと言える。

現在の都市というのは記号の絶え間ない流動だ。記号は記号と出会い、新たな記号を生成し、記号を記号に取り込む。実体としての外部が存在するわけではない。それは実体としての全体というものがかき消えたということと同等である。実体としての都市が存在するわけではない。都市とは記号体系の上ではなく、むしろ記号と記号との間に、その不可視の虚空に佇立する蜃気楼のことだ。歴史が霧散する。そのとき都市は砂漠とよく似た印象に包まれる。記号は砂漠の砂であり、体系として歴史として粘着することを拒絶する。都市が「無縁の場」であつたことをもう一度思い出してほしい。かつて田園において人は共同体的だ

ったけれども、都市において人は不可避免的に単独者的だ。それは田園において人（記号）は記号としての人や自然と自足的な関係にあり、外部というものを実体として隔離しているのに対して、都市においては記号は常に廃虚にさらされ、廃虚を内在化しているからに他ならない。

愛（歌謡）は都市に発する。それは単独者が目撃する微粒子的な砂漠に鳴り渡るコーランなのだ。

言葉なく、僕は白塔山公園から足を踏み出した。黄河を渡る黄河鉄橋（中山橋）の歩道を歩いていく。背後には白塔山と回族やウイグル族の人々が多いといわれるレンガ造りの低い街並が黄河の流れに寄り添うようにして伸びている。所々には玉ねぎのような形をしたモスクの屋根がのぞいている。ゆつくりと黄河を渡っていく僕の脇を、ひっきりなしに車やバスやトラックが通り抜けていった。前方には近代的な四角いビルディングが立ち並ぶ蘭州の市街。橋の欄干から黄河の川面を覗き見ると、まるで巨大な生き物の背のようで今にも身震いを始めるのではないかというような錯覚にとらわれた

「砂漠から、中華へ：砂漠から、中華へ：」と僕は一足ごとに呟いていた。あるいは、

「砂漠の唯物論：砂漠の唯物論：」とも。もつともその意味は？と問われれば、絶句するしかないのだけれども。